

〈インタビュー〉

玉川大学  
工藤洋路 先生2019年 TOEIC Bridge® Test  
4技能化によせて

## 本質的な英語力を 培う授業設計と テストの活用

2019年にリデザインが予定されている TOEIC Bridge® Test。Everyday Englishを問うオーセンティックなテストという側面は変わらず、従来の Listening・Readingが、SNSなどのより現実生活に即した場面に刷新され、新しく Speaking・Writingタスクが加わり4技能化されます。

本号では、英語教育学を専門に英語ライティング論や英語授業論を研究されている玉川大学の工藤洋路先生に、TOEIC Bridge® Testの活用を見すえた学校の英語教育についてお話をうかがいました。

### 英語力全般を伸ばすことを考える

— 英語の外部試験が4技能化していくことによって、高校ではどのように指導が変わっていくとお考えでしょうか。

**工藤**◆ 大学入試の4技能化が進むことで、おそらく指導現場では、新しく何かやらなければならないという雰囲気になったり、何かしら自分の指導を変えなければと思う先生は比較的たくさんいるのではないかと思います。

そこで、何か対応を考えた時、例えば導入されるテストにメール返信型の記述問題や写真などの描写問題があれば、授業でもテストと同じ問題形式の練習をさせてみるということがあると思います。生徒も一見、点が取れそうなので安心できますよね。ただ、問題形式に応じた練習ばかりやってしまうと、本来問われている力を伸ばす練習が忘れがちになり、本質的な英語力が培われにくくなります。やはり理想は、問題形式に依存しない形で勉強することで、英語力を全般的に伸ばしていくことではないでしょうか。スピーキングもライティングも、どんな形式の問題が出てきても対応できるようにするというのが本質的な英語力を身につける発想になるかと思いますが、その方法は多種多様です。

— スコア対策やテスト形式の練習にとどまらないで、現実生活に即した場面で使用するための本質的な英語力を身につけていくというのが大事ということですね。

**工藤**◆ それが理想だと思います。実際のコミュニケーションにはさまざまな場面があるなかで、テストは現実の言語の使用場面の一面しか切り取れません。形式依存の勉強に偏ると、言語使用のほかの場面が体験できなくなります。なる

### TOEIC Bridge® Testの 特長

TOEIC® Listening & Reading Testへの架け橋として、初中級レベルの指標となります。「ジュニア向け」という位置づけではなく、誰もが受けられる英語テストとして日常生活に根差した基礎的な英語能力を測定します。

### TOEIC® Programが扱う 内容

TOEIC® Programでは日常生活やグローバルビジネスでの場面を想定した幅広い内容を扱っています。いわゆる「ビジネス英語」の知識を問うものではありません。

## 時代と歩んだ

### TOEIC® Programの変遷

- 1979年12月  
TOEIC® L & R スタート
- 2001年11月  
TOEIC Bridge® Test スタート
- 2006年5月  
TOEIC® L & R リデザイン
- 2007年1月  
TOEIC® S & W スタート
- 2016年5月  
TOEIC® L & R 新形式スタート
- 2019年  
TOEIC Bridge® Test リデザイン

### TOEIC® Speaking & Writing Testsの評価方針

英語の正確性ではなく、適切なコミュニケーションとして、問いの文脈との関連性や、発音や文法、語彙の活用が有効であるか障害となったかを評価します。

### TOEIC® Programの対象

世界160カ国、年間約700万人が受験。日常やグローバルビジネスにおける英語コミュニケーション能力を問うテストとして、全世界の方々を対象に開発されています。

べく授業ではいろいろな体験をさせて、テストで測れる部分はテストで測るというも方法の1つです。例えば、スピーキングとかライティングに必要な力の根本的な要素というのは、いくつかあります。特に大学入試レベルになると、ライティングはまとまりのある文章を書ける力が必要になりますが、ライティングだけ練習して伸ばそうとしても力がつくわけではありません。そこには、リーディングの活動も必要ですし、技能を超え、ほかの教科など、さまざまな体験や学びも関係しているという考えを先生がもって授業を実施していくことが大事になると思います。それには、中学校・高校でそうした授業の経験がない先生がイメージしやすい教材のサポートや、先生のトレーニングも必要になると思います。

## 場面設定や状況に合わせた 評価システムを導入したテストの活用へ

——外部試験の4技能化の流れを見すえて、ライティングがご専門のお立場から、これから高校の先生方はどのように指導を変えていくと良いでしょうか。

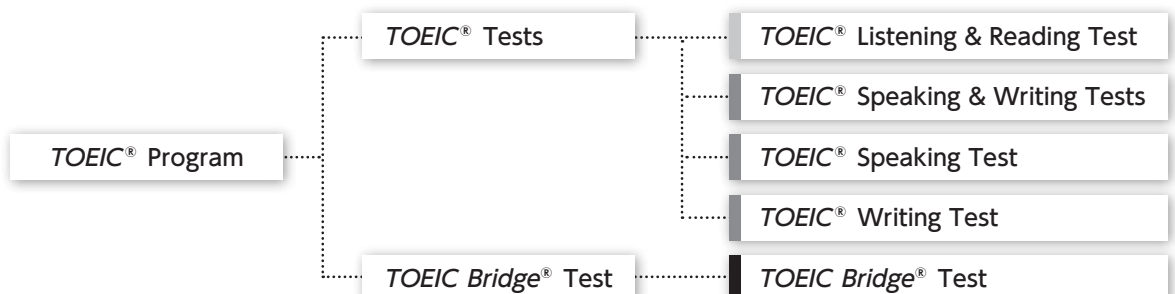
**工藤**◆現実の使用場面に即したテスト問題にする、いわゆるコミュニケーション・テストの視点を取り入れるというのは非常に大事なことだと思います。テストだとしても、何のために書いているか、誰に向けて書いているかを念頭において書くという、現実世界のシミュレーションは大切です。

ですが、いったんテストのライティング問題を書き始めるとそういう視点が抜けてしまう場合があります。そこで大事なことは、コミュニケーション・テストの視点をもつ問題に採点や評価を連動させ、一連の流れで能力を測るということですね。例えば、海外の○○さんに日本の文化を紹介してみようというタスクに対して、日本の正月について説明しようとして *osechi* と書いたとします。日本のことを知らない海外の人を前提に書いているのだったら、*osechi* の説明がなかったら減点するような採点方式にしてみる。

コミュニケーション・テストで、テストを受けながら現実の英語使用の場面を体験するのは悪いことではありませんが、設定された場面や状況に合わせた評価システムまで導入できていないと、コミュニケーションな設定をする意味が低減されてしまうと思います。

——TOEIC Bridge® Testでは、書く時も話す時も、誰に対して書いたり話したりするかを意識させるような設問が問題形式のなかに組み込まれています。

### ▼ TOEIC® Programの体系図



**工藤**◆中学校・高校の先生がライティングの添削をする際にも、“相手意識”をもたせる設定条件を入れてほしいですね。先ほどのosechiの例でいえば、「海外にいる○○さんに書いているのだから、osechiだけではわかりにくい。説明をつけ足して」というコメントがあると生徒も意識しやすくなります。しかし、そういう設定なしで書かせていたら、生徒は実際に読んでくれる先生に向かって書いてしまうので、osechiとえば先生には自明のため、その説明が必要と言われるとむしろ驚く生徒もいると思います。

テストでコミュニケーションを意識した場面設定が出てくると、おそらく授業で練習する時の課題も似たような形になるので、先生方は、誰に向かって書いているのか、何の目的で書いているのか、というところを指導に取り入れるようになるでしょう。そうしたポジティブな効果に向けて、TOEIC Bridge® Testのような外部試験のタスクを知ることが役に立つのではないかと思います。

## 次世代の英語教育を見すえた より良い授業設計のあり方とは

—日本の英語教育政策の変化を受けて、次世代の英語教育がこれからどのように変わっていくことを期待されていますか。

**工藤**◆まず、2020年度(先行実施は2018年度)より小学校3年生から英語教育が始まるので、外国語活動・教科として英語の学びを経験してきた小学生を、中学校、高校とそれぞれ段階を踏みながら先生がうまく受け取って、世の中に送り出していかなければなりません。高校の先生方は自分が受けてきた英語教育をベースにしながらも、これまでと学習履歴の異なる生徒に教えるための新しい方法を模索していくことが大事になります。

もう1つは、4技能というとスピーキングとライティングを重視しがちですが、絶対に忘れてはならないこととして、スピーキング、ライティングのアウトプットの能力を高めるには、前提としてリスニング、リーディングのインプットを強化していかなければならないということです。アウトプットの練習だけをした場合、いまある言語面のリソースを使う精度や、正確性、スピードを高めることはできますが、もともとリソースが少ないなかでいくら練習しても、アウトプットのクオリティはそんなに変わりません。やはりインプットをたくさんやって、それをベースにアウトプットを行う。アウトプットがうまくいかなければ、再度インプットに戻ってさらに強化する。特に小学生と中学生の前半はリスニングを多くしたほうが良いですし、中高生もインプットをたくさんしたほうが良い。十分なインプットに基づいて、アウトプットするサイクルを作っていけると良いですね。(2018年8月、於:玉川大学)



**工藤洋路**(くどうようじ)

玉川大学文学部比較文学科准教授。専門は英語教育学、英語ライティング論。東京外国語大学博士課程修了。ELEC同友会英語教育学会 ライティング研究部会部長。全英連全国高等学校生徒英作文コンテスト審査員。主な著書は『自由英作文はじめの1冊』(アルク)。文部科学省検定教科書編修にも携わる。

ETS, the ETS logo, PROPELL, TOEIC and TOEIC BRIDGE are registered trademarks of Educational Testing Service, Princeton, New Jersey, U.S.A., and used in Japan under license.

TOEIC® Programについてのお問い合わせ先

**IIBC** 一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会

公式サイト▶<https://www.iibc-global.org/> TEL▶03-5521-5012 FAX▶03-3581-5512

\*土・日・祝・年末年始を  
除く10:00~17:00